

「同時型、逐次型服棒モードにおける回収率・回答者構成」, 「一般ウェブ回答者とオンラインパネル」, 「ウェブ調査におけるセンシティブな内容の質問の方法の検討」といった報告を行っていた。

筆者は「性・ジェンダー (1)」部会で「性的指向の自認を「決めたくない・決めていない」人はみなが性的マイノリティなのか？」(国立社会保障・人口問題研究所 釜野さおり・ワシントン大学大学院平森大規)を報告した。キャンセルや報告済みとする人がいたため、同部会は「性的指向・性自認をめぐる「正統的」知識と偏見の再生」(金沢大学 岩本健良)および「定まらない性自認を生きる」(東京大学院 武内今日子)の合計3報告のみであり、3時間の部会時間は、質疑や全体のディスカッションには十分すぎるほどであった。「性・ジェンダー」の他の部会では、「中高年の同性婚に対する意識」(明治学院大学 石田仁), 「ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルス悪化の規定要因」(上智大学 小森田龍生), 「性的少数者の貧困研究について」(早稲田大学 志田哲之)といった報告もなされていた。

同時にいくつもの部会が開催されたため、オンラインと言えども関心のある報告をすべて視聴することは難しかったが、どの部会においても配布資料がダウンロードできるようになっていたことは、とてもよかったと感じている。なお、2021年度の大会は11月13日~14日、東京都立大学で開催予定とのことである。
(釜野さおり 記)

高齢者の医療介護における ICT 活用に関する国連 ESCAP ウェビナー

2020年11月4日(水)~5日(木)にかけて、国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)が韓国保健福祉部の共催を得て、「高齢者の医療・介護のアクセスと質向上に ICT を用いる」と題するウェビナーが開催された。現在 ESCAP では、同タイトルのガイドブックを作成中であり、その内容についての報告や、アジア太平洋地域の各国の事例紹介などが行われた。また新型コロナウイルス感染症の高齢者の健康への影響について、タイ、日本、インドなどの事例が紹介され、筆者は各種月別統計を用いて日本の状況を報告した。

韓国の介護に資するネットワークの構築や、タイの介護ロボットなどの紹介があり、実際にどれだけこなれた形で有効に活用されるのかは今後の課題と感じられたが、このような事例があたりまえと思える位、この分野は進展がみられるようである。また新型コロナウイルス感染症の流行下で高齢者の孤立防止や介護予防などで ICT が活用されることも期待されている。
(林 玲子 記)